

大切にしていること ——心の教育

伝統の「心の教育」

本校の母体である学校法人摺河学園は、兵庫県播磨高等学校の運営を通して、長い年月にわたって「心の教育」を実践してきました。他者を思いやる心を持ち、誰か・何かのために貢献することに大きな喜びと意義を感じる人間性を育てること。その新たな実践の場として選ばれ、開校されたのが本校です。

少子高齢化が加速している現代の社会において、厳しい国家財政を背景に予算の制約があるなか、医療福祉の現場はその「質」を、以前にくらべいっそう問われるようになりました。高齢者や障がいをもつ方々とそのご家族、小さな子どもを持つ家庭、健康に不安を抱く方々が安心して生活していくことのできる社会づくりには、数え切れない課題があります。

この分野を担う人材を育てために、伝統である「心の教育」を、もう一歩踏み込んで実践することを、本学園は使命と捉えました。

理学療法・介護福祉・保育・医薬品販売に関する仕事は、いずれも、人と向き合い、命と向き合う仕事です。だから、ありのままの相手と向き合い、相手を思って、生きることへの夢と一緒に描くことのできる人間を育てたい。それが、開校に当たって、本校がいちばんに願ったことでした。

「相手を思う心」を学ぶ科目

本校では、「心の教育」を実践するため、全学科共通のオリジナル必修基礎科目として、「ホスピタリティ・デザイン学」と「コミュニケーション学」を開設しています。

「ホスピタリティ・デザイン学」では、「形から入って心を育てる」という考え方に基つき、美しい立ち居振る舞い、挨拶、身だしなみ、言葉遣いなどを身につけ、医療福祉の現場で求められる人間性を養います。「相手の立場に立って考えること」を軸に、自らの立ち居振る舞いを常に見直しながら、美しい所作やマナーを通じて、「信頼される社会人」としての基本を学んでいきます。

もうひとつの「コミュニケーション学」では、ホスピタリティ・デザイン学で学んだことを基礎として、実際にさまざまな立場の人々と関わるなかで、コミュニケーションをより円滑にできる能力を培います。そのうえで、医療福祉の現場で不可欠となる「心の通い合う人間関係」を構築するために、ノウハウとスキルを身につけることを目的としています。

「ホスピタリティ」という考え方

ホスピタリティとは、他者を思いやる気持ちから生まれるものであり、相手の気持ちを察して行動すること。それが本校の考えるホスピタリティの基本です。この「行動」のために、礼儀作法やマナーが大切になります。

介護福祉学科で学ぶ「ブックトーク」の実習。聴きやすい声を、見やすい角度を、喜んでもらえるお話を。模索し続けるのは対象者の心に真心を届ける方法です。



とりわけ、理学療法・介護福祉・保育・医薬販売の現場では、本当の意味でホスピタリティの姿勢が求められます。それは、これらのどの仕事においても、サービスの受け手と送り手のあいだに、心の通い合ったしっかりとした信頼関係が不可欠だからです。

仮に自分の家族が病気や事故によって身体に障がいを抱え、日常生活が不自由になったとすれば、病院や施設、自宅などでリハビリテーションや介護を受けることになります。そうした際、担当する理学療法士や介護福祉士を、自分が「信頼できる」と思えるかどうかは、とても大切なことです。保護者から大切な子どもを預かる保育士や、医薬品を扱うプロとして接客する登録販売者も同じように、サービスの提供側と受け手のあいだに、信頼関係があつて初めて成り立つ職業といえます。

その理由は、これらの職場においては常に、「命」にかかわる責任が問われるからです。だからこそ、「相手の立場に立つて考えること」が大切になってきます。リハビリに励む人、介護が必要な人、幼い子どもたち、健康のことで悩む人。これらの方々に対して、いつも相手の立場に立つてものごとを考える。そうすることで、自分の考えを押し付けるのではなく、相手が本当に求める

ことを実行できるのです。

一人ひとりの人生を見据えて

人間としての魅力は、日々の生活に根づいた形で身につけたものでなければ、本物とはいえません。付け焼刃で身につけたものは、すぐに相手から見透かされてしまうでしょう。普段から自分を磨き、心の成長を促す姿勢がきわめて大切になります。

だからこそ本校は、ホスピタリティ・デザイン学やコミュニケーション学といった授業の場だけでなく、学校生活そのものを、心の成長を促す場、自分を磨くことのできる場である、と捉えています。

「ホスピタリティ・マインドカード」と呼ばれる制度は、その象徴ともいえる取り組みです。これは、学校生活や現場実習において、「感動を与える」行いがあつた学生に対して、教職員がホスピタリティ・マインドカードにその旨を記入します。一定以上のカードを獲得した学生は、顕彰の審査対象となるなど、大きな励みとなっているようです。

このように、学校生活全般のなかできめ細かく展開さ

れる本校の「心の教育」は、学生一人ひとりの人生を見据えた取り組みともいえます。「ホスピタリティを身につける」ということは、学生が社会に出た後も、飽くなき向上心のもと、継続して追求していくべきものであり、そこに明確な答えがあるわけではありません。相手によって、またその場の状況によって、ホスピタリティの形は千差万別だからです。そのすべての土台となる考え方が、「相手の立場に立つて考えること」なのです。

学生たちには卒業後も、それぞれの現場で働きながら、それぞれのホスピタリティを追求し続けてほしい。あらゆる場面で、「相手が本当に求めていることは何なのか」「それをかなえるためにはどうすべきなのか」を考え、しっかりと行動に移し、一人でも多くの人を幸せにできる人間として成長し続けてほしい、本校はそう考えています。

「守」から「破」への進化を

本校では、学生たちが将来、社会に出た時、社会人としてのルールに対応できるように、学生生活における基本的なルールを決め、遵守するように指導しています。

そして現在、学生が自ら考え判断できる自立性を養うことを目的として、このルールの一部変更を検討しています。

その理由は、本校の「心の教育」の原点である「形から入って心を育てる」を、さらに一歩前進させたいからです。まず、しっかりと形を理解し、自然にそれができ

るようになる。すなわち「形から入る」ということは、すべての原点となる基礎基本です。そして、この原点をしっかりと自分のものにすることによって、応用が生まれます。

茶道や武道に用いられる言葉「守・破・離」は、それぞれの「道」の上達に至る経緯を示しています。「守」とは、師の教えを正しく守り、それをしっかりと身につけること。「破」とは、師に教えられしっかりと身につけたことを、自らの特性に合うように心がけ高めること。そして「離」とは、「守・破」の段階を経て到達する、何物にもとらわれない心のあり方を指します。

例えば、お辞儀であれば、正しい方法・型を学び、それを相手への尊敬・親愛の気持ちとして表現できるまでに上達させる。そしてその先に、相手を思う心ゆえに、場面によって「型を破ること」も含め、使いこなす段階があることを示しています。

「守」は、「守」そのものに到達することが目的ではなく、必要な通過点に過ぎないものです。「守」から「破」へと進化していくなかでこそ、心が伴う美しさへとつながっていく、そう本校は考えています。

すべての学生が「破」の段階に届き、知識・所作の集合体としての「教養」を身につけ、自分なりの心・気持ちを込めた振る舞いを通じて、相手と豊かなコミュニケーションを築けるようになること。それは、本校が掲げる「建学の精神」の確かな実践といえるでしょう。